ヒューマンドキュメンタリー映画

『ゆめのほとり －認知症グループホーム 福寿荘－』 プレスリリース

ゆめのほとり

――認知症グループホーム 福寿荘――

でもね きっと
心は全部わかってるんですよ

認知症の人は“何もわからない人”ではありません。
“本人なりの思いや願い・できる力を秘めている人”です。
グループホーム福寿荘で暮らす人々の、
生き生きとした心をスケッチしたドキュメンタリー。
「いのち」の息づかいに耳を澄ませてみてください。

〈ヒューマンドキュメンタリー映画〉
伊勢真一 演出作品

2015年/カラー/1時間25分
製作／いせフィルム http://www.isefilm.com

いせフィルム
TEL：03-3406-9455　FAX：03-3406-9460　メール：ise-film@rio.odn.ne.jp
〒150-0002　東京都渋谷区渋谷1-3-7 青山N-ブリックビル3階
HP： http://www.isefilm.com

認知症グループホームを舞台に、一人ひとりの物語をスケッチした
穏やかで、静かで、優しいドキュメンタリー。

「認知症」という病を見つめる以上に、「人間」を見つめよう。
ただただ寄り添い、耳を澄ませてみよう。

映画『ゆめのほとり－認知症グループホーム 福寿荘－』は、
北海道・札幌市にあるグループホーム 福寿荘の日常を、
2年間にわたって記録したドキュメンタリーです。
映画は、重度・軽度さまざまな認知症の人々が、
それぞれの日々を共に生きる姿を淡々と映し出します。

この映画では、認知症に関する医学的な知識や社会制度などの説明や解釈は、ほとんどされていません。
認知症という病を見つめる以上に、そこに居る一人ひとりを見つめ、
素朴に眼差しを向けること、ありのままの姿に触れることを大切にしました。
認知症の本人に寄り添い、目を凝らし、耳を澄ませて、見つめること……。
誤解や偏見を取り除くことこそが、認知症理解の第一歩だと思うのです。

認知症の人は“何もわからない・できない人”ではありません。

“本人なりの思いや願い・できる力を秘めている人”
“地域社会のなかで築いてきた暮らしや人生があり、今を生きている人”
“日々、喜怒哀楽を共にしながら、支え合っていくパートナー”です。

映画『妻の病－レビー小体型認知症－』（2014年製作）で、
認知症の家族を夫婦愛の物語として描いた伊勢真一監督とそのスタッフが、
グループホームを舞台に、一人ひとりの物語をスケッチした、
穏やかで、静かで、優しいヒューマンドキュメンタリー。

認知症のこと、そのケアのこと、そして“生きる”ということ。
観る人がそれぞれに深く思いを巡らせる映画として、受け止めてもらえたらと考えています。

グループホーム 福寿荘とは

北海道・札幌市内にある施設。
アルツハイマー型認知症、レビー小体型認知症、
脳血管性認知症、前頭側頭型認知症など、
重度・軽度さまざまな症状を持つ42名の認知症の人々が
共に暮らしている。武田純子代表が「一人を大切に」
「支え合う心」「安心して暮らせる社会づくり」をモットーに、
2000年に立ち上げた。

シッ、静かに・・・。

ー映画『ゆめのほとり』に寄せてー

――人を好きになること。
ヒューマンドキュメンタリーを創るのに特別な才能はいらない。人を好きになることができれば、それでいい。

縁あって二年間程、認知症のグループホームに通い、おばあちゃんおじいちゃんたちにカメラを向け続けた。素敵だなぁ、と感じさせるお年寄りたちに引き寄せられるように撮影が始まり、いつの間にか四季は巡り、気がついたら編集に悩み苦しみ、やがて音楽が奏でられ、映画ができていた。

「認知症」という病を見つめる以上に、
「人間」を見つめよう。
ただただ寄り添い、耳を澄ませてみよう。
そんな想いで創りあげた作品だ。

そこにはいつもお年寄りたち一人ひとりの呟きが、笑い声が、寝息が、そして歌声が、聴こえていた。もうとっくの昔に旅立ってしまった我が母とよく似た雰囲気のおばあちゃんは、目が合うとニッコリ笑いかけてくれるので、つい依怙贔屓して、たんと撮影した。そのおばあちゃんは、自作の歌を即興でつくって唄ってくれたり、突然「みんな寂しいわ……」と言い出したりもした。

讃美歌を唄うおばあちゃんの傍には、数え歌を唄うおばあちゃんがいた。軍歌を唄うおばあちゃんと「そんな歌、唄っちゃいけない！」と喰ってかかるおばあちゃんのケンカ。
そばに誰かが居てくれることの、人と人が関わっていくことの幸せのようなものが、そこにある気がした。

およそ八畳程の個室は、故郷の写真、亡き連れ合いとの写真、孫たちの写真などで、どの部屋も賑わっている。別れて暮らしている人も死んでしまった人も一緒に居るんだなぁ、と思う。
喋るのが苦手になり、何も語らないお年寄りたちの心のなかも、それぞれの思いや願い、夢で一杯なのだろう。

認知症の専門的なことは、よくわからないけれど、ほんのしばらくお付き合いして言えることは、“認知症の人は何もわからない、できない人”ではなく、“できる力を秘めている人”だということ。“喜怒哀楽を共にしている人”だという真実だ。

偶然のように出逢ったお年寄りたちに、すっかり惚れ込んでしまった私は、その想いを映像や音や音楽に託した。そして、ラブレターのような映画ができあがった。

『ゆめのほとり』

もしかしたら、片想いかもしれない。
きっと片想いにちがいない。

認知症グループホーム 福寿荘を舞台にした、
おばあちゃんおじいちゃんたちの
生き生きとした群像ドキュメント。

シッ、静かに……。
「いのち」の息づかいが聴こえてきますよ。

かんとく・伊勢 真一

主人公のみなさん

認知症グループホーム福寿荘の仲間たち

ここでご紹介させていただいた方の他にも、たくさんのおばあちゃんおじいちゃんたちにご出演いただいています。
みなさん一人ひとりが主人公の物語です。

自作の歌で会話するおばあちゃん

「みんな･･･寂しいわ」

讃美歌を歌いお祈りするおばあちゃん

「天にます我らの父よ･･･」

冗談好きで明るいおばあちゃん

「困ってること？あるよ。
･･･美人になりたいこと！（笑）」

福寿荘のキャンディーズ！？

「18（歳）です」
「18にもなってるの？　私14歳」
「いくつと18？（笑）」

エプロンをするおばあちゃんと息子さん

数え歌を歌うおばあちゃん

「一に 俵をふんまいて
二で にっこり笑って
三で 盃いただいて
四つ　世の中良いように
五つ　泉の湧くように
六つ　無病息災に
七つ　何事ないように･･･」

仲良しの母と娘

「こうやって返事してくれるの嬉しい。
『うん？』って返事してくれるの嬉しい」

丁寧にうがいをするおばあちゃん

「認知症の人って普通の人なんだってことを教わったんですね。
本当に困ってる人が色んなことを教えてくれる」

武田純子（たけだ・じゅんこ）※写真左
グループホーム 福寿荘 代表

1988年に看護師として老人病棟の認知症の人たちと出会う。
2000年から北海道札幌市でグループホーム福寿荘を運営。
2006年からは若年認知症専門ユニットとデイサービスを開始。

映画に寄せられたご感想

いつかぼくにもそんな日が来る。
ゆめのほとりに浮かぶ船。
この世に住処をなくしても、心に歌が生きている。

――― 友部正人（シンガーソングライター）

1950年生まれ。72年にアルバムデビュー。以来『ぼくの田舎』まで23枚のアルバムを発表。また詩集など書籍も多数刊行。最新刊は詩集『バス停に立ち宇宙船を待つ』。ニューヨークと横浜を行ったり来たりの暮らし。

「ゆめのほとり」／春を生きる （友部正人）

国際線の飛行機に乗っていると、
座席に固定されたまま食事などのサービスを受けるので、
なんだか介護を受けているみたいだな、と思うことがある。
実際には歩いてトイレにも行けるし、
アテンダントが用意した水や食べ物を勝手に取りに行くこともできる。
ちょっとした自由の規制なのにそんな感覚に陥るとしたら、
将来のぼくの介護施設での暮らしはどうなるのだろう、と
不安になったりするが、この映画を見て少し安心した。

自分で何もできなくなると
何もかもを人に手伝ってもらうようになる
生きることを手伝ってもらい
死ぬことを手伝ってもらう
そのために母の周りにはたくさんの人が集まって来て
やがてその人たちも姿を消すだろう
ある人たちは長くいて
ある人たちはとても短く
そんな縁もすべてなくなり
街ではマメナシが花を咲かせるだろう
だけど母は介護施設で
長い冬を生きている

（詩集『バス停に立ち宇宙船を待つ』より）

これはぼくがニューヨークにいるときに、
愛知県の介護施設にいる認知症の母を思って書いた詩だ。
マメナシはニューヨークによくある街路樹で、
春になると桜みたいな花を咲かせ、
花が風で揺れると、空が一斉に明るくなったような気がする。そんな春のニューヨークにいると、
母を遠く離れた街に置き去りにしたような気がする。
思い浮かべるのは施設のうす暗い冬の廊下だ。

でも「ゆめのほとり」の中で
武田さんが言っている言葉を聞いて、
ぼくの感じ方は変わった。
武田さんは映画の中でこう言っている。
「人間は生まれるときと死ぬときは
誰かに手伝ってもらうのが当たり前」と。
それを聞いてぼくの心は救われた。
両親を他人任せにしているのは本当だけど、
両親は両親でもしかしたら
自分の最後の春を生きているのかもしれない、と。
札幌にあるグループホーム「福寿荘」では
様々な認知症の方が暮らしている。
人生最後の春を共に生きた人たちのことは、
「福寿荘」ではどんな風に残されて行くのだろう。
もしかしたら「ゆめのほとり」というこの映画は、
「福寿荘」で生きた人たちの
卒業アルバムになるのかもしれない。

映画に寄せられたご感想

おばあちゃんたちに会って、監督は絵描きになった。
『妻の病』が肖像画のように描かれたタブローなら、
『ゆめのほとり』は儚い今を捉えたスケッチ帖だ。

——— いせひでこ（画家・絵本作家）

1949年北海道生まれ。スケッチの旅での出会い・時間を大切にする現場主義に徹した作品で知られる。『ルリユールおじさん』をはじめ数多くの絵本作品を出版。絵と文によるエッセイ等も多数執筆している。

ここらでは、二度童子（にどわらし）というんだよ。（いせひでこ）

北海道の冬の海。遊行期（ゆぎょうき）※の暗示か雪の風景。
一転して暖かい灯のともるホームの室内。
「ふるさと」を歌うおばあちゃんたちの目線の先に窓の雪。
「みんな、わすれちゃった」と、ぽつり。
歌っていたと思ったらもう眠ってる。
みんなごっこ遊びをしているの。
忘れるごっこ。ミュージカルごっこ。寝たふりごっこ。
でも、忘れたことを忘れていない。
「ここがさびしいの」と、見えない何かをそっと手で包む。
「私には娘と息子がいるの」迎えに来ない家族を待って、
スーツケースを横に深夜座り込む。
「だからみなさん、お帰りになって」
介護者をいたわることも忘れない。
「あ〜あ〜」花を見て感動して泣く。
「他人の方がいい。でもいざとなったら子どもだよ」
みんな理屈をもっているのだ。

のむらまゆみさん。
かたのきみこさん。
たかおかかずこさん。
みんな名まえを呼ばれてうれしいお顔。
深夜、そっとふとんを掛けなおす介護者。
眠りの顔がシーンごとの句読点のように写され、
窓の外に内に雪はつめたくやさしく降りつづく。

太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪降り積む。
次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪降り積む。（三好達治）

「認知症の人のことをここらでは二度童子と言うんだよ」
と教えてくれたのは鶴岡で読書活動している86歳の人だった。
みんな子どもにかえっていくの。
お絵かきしよう。ご本よもう。
福寿草咲いたらみんなで見よう。

おばあちゃんたちに会って、監督は絵描きになった。
『妻の病』が肖像画のように描かれたタブローなら、
『ゆめのほとり』は儚い今を捉えたスケッチ帖だ。
監督は、脈絡のない断片（スケッチ）をつなげ、
それぞれのモチーフ（家族、本人、介護者）を
ゆめの舞台の主役にしたてていく。
主役たちの記憶の断片が雪のように舞う。

私の祖母も札幌のあるホームで99歳までお世話になった。
亡くなる少し前、母と訪ねた。
ほとんど眠っていたが目が覚めると、
「私から生まれたのかい？」
と、見知らぬ娘（私の母）に向かって無邪気に笑った。
ベッド横に、習字の半紙が数枚重ねて貼ってあった。
子どものように素直なひらがなで「うに」「はる」……
一枚一枚めくっていくと、突然哲学者のような字で、
「万物は甦る」が現れた。
—— ゆめのほとりで書いたのだろうか……。

※遊行期…人生を四期に分ける思想のうちのひとつ。
一説に、学生期(がくしょうき)（0〜24歳）・家住期(かじゅうき)（25〜49歳）・林住期(りんじゅうき)（50〜74歳）・遊行期（75〜90歳）。

スタッフ

映画『ゆめのほとり −認知症グループホーム 福寿荘−』

2015年／カラー／85分／ハイビジョン

出演　認知症グループホーム福寿荘の仲間たち
　　ご家族のみなさん
　　武田純子
　　職員のみなさん
題字　細谷亮太
撮影　石倉隆二　世良隆浩
音響　米山靖
録音　渡辺丈彦　永峯康弘
照明　工藤和雄
編集技術　尾尻弘一
整音　井上久美子
主題曲　「マイムマイム」
編曲・演奏　ママクリオ
　　クリスチィヌ
　　うえむらまさゆき
　　大野ミチル
　　ロケット・マツ
レコーディングmix　小俣佳久
絵　うえむらまさゆき

宣伝デザイン　森岡寛貴
企画・制作補　遠藤郁美
上映デスク　鷲見真弓
制作デスク　増馬則子
製作協力　ヒポコミュニケーションズ
　　一隅社
　　ハチプロダクション
　　ジオングラフィック
上映協力　MOCプロジェクト
企画・製作　いせフィルム
演出　伊勢真一

演出・伊勢 真一（いせ・しんいち）

映像作家

1949年東京生まれ。
『奈緒ちゃん』『えんとこ』から『風のかたち』
『大丈夫。』などまで、長年にわたり
ヒューマンドキュメンタリー映画を中心に製作。
様々な人の日常を温かい眼差しでほのぼのと映し出す
作風で知られる。
近作は『傍（かたわら）～3月11日からの旅～』（2012）、
『小屋番 涸沢ヒュッテの四季』（2013）、
『シバ 縄文犬のゆめ』（2013）、
『妻の病－レビー小体型認知症－』（2014）など。
2013年「日本映画ペンクラブ功労賞」受賞。
翌年2014年には「シネマ夢倶楽部賞」を受賞。

上映について

伊勢真一監督のヒューマンドキュメンタリー映画は、
自主製作の処女作『奈緒ちゃん』（1995年）以来、
20余年にわたり全国各地の様々な地域で、
主に自主上映会によって観られてきました。
“映画は観客と出会い、はじめて映画になる……”
という考えをモットーに、上映活動に取り組んでいます。

映画『ゆめのほとり –認知症グループホーム 福寿荘–』も、
自主上映を募り、上映の輪を広げたいと考えています。

映画『ゆめのほとり –認知症グループホーム 福寿荘–』
2015年／カラー／85分／ハイビジョン
16：9　DCP・HDV・DVカム・ブルーレイ・DVD

ゆめのほとり

—認知症グループホーム 福寿荘—

《お問合せ先》

いせフィルム
http://www.isefilm.com/
TEL：03-3406-9455 ／ FAX：03-3406-9460
E-MAIL：ise-film@rio.odn.ne.jp